

- なく、それが原因で参加者は一定の角度からスクリーンを観なければならなかった。
- 会場は講演には理想的ではなかった。スクリーンを観るのが困難な席が多くあった。
- 学術的なニーズを満たすにも相応しかつたし、また、美しくリラックスできる環境だった。

3. 宿泊施設

リザンシーパークホテル：優良(16)、良(0)、可(0)、不可(0)

シーサイドハウス：優良(24)、良(3)、可(3)、不可(0)

- 清潔で、景色は素晴らしく、人々もとても協力的、デスクも仕事がしやすかった。
- 素晴らしい宿泊施設。
- 部屋がとても清潔。
- きれいで過ごしやすかった。部屋からの sea view がすばらしかった。
- どんな科学者でも会議中のここの滞在を喜ぶだろう。
- ひげそりがあればよかった。
- シャワー室が狭い。

4. 食事

優良(37)、良(7)、可(2)、不可(0)

- 日本食自体にあまり馴染みがない。
- とても美味しく、バラエティーに富んだ料理だった。沖縄料理も口に合った。
- とても美味しかった。
- もっと沖縄料理が食べたかった。
- 種類、味ともに満足。多少でも沖縄料理があれば、もっとよかった。
- 内容はホテルのものも良かったが、朝にごはんも食べたかった。
- 時々脂っこく感じた。

5. 事務局

優良(40)、良(5)、可(1)、不可(0)

- よく手伝ってくれたし、友好的だった。
- とても優しく、能力もあり、能率の良いスタッフだった。みんなに御礼を言いたい。
- サポートは素晴らしかったが、事前の情報は不完全だった。私戻しに関する情報はあまりがなかった。
- とても役に立ち、気配りをしてくれた。
- とても友好的で協力的なスタッフだった。最高！
- 日帰り旅行のタクシー手配など、非常に助かった。晴れていない日の過ごし方の提案がもっとあればよかった。
- スタッフのサポートに感謝している。
- スタッフはとても助けてくれたし、良かった。
- 素晴らしいという言葉以上に素晴らしかった。際立ったサービスだった。
- 全員とてもよくサポートしてくれた。
- OIST のホームページに、ここの場所が、白雲荘前と書いてあったが、Seaside House 前ではないか？

6. 沖縄の印象

優良(35)、良(10)、可(0)、不可(0)、未回答(1)

- 思ったより肌寒かった。
- 観る時間が無かった。私が観たものと言えば、那覇空港の綺麗な蘭！
- 海外のクレジットカードが使用できる ATM が必要！
- 今まで訪れた中で、もっとも景色が素晴らしい場所。
- とても良い所。今度はおそらく夏に、(観光客として) 来たい。
- 景色が素晴らしい。
- 前半、ずっと曇りだったので。
- 講演の合間にもっと島を観光する時間があればよかった。
- 美しい島と人々。
- 良い。OIST に行く交通手段が少ないのが大変な点。

7. その他ご意見、ご提案

- 各セッションの議長はそれぞれの分野について最大5分間の導入説明があればよかった。そうすることでその分野の専門でない参加者にも主な課題が理解できる。
- あらゆる面で素晴らしかった。
- ポスターセッションの時間帯が、午後の真ん中の時間帯ではなく、昼食のすぐ後またはディナーのすぐ前だと良かった。
- すばらしいワークショップだった。主催者と事務局に感謝したい。1時間の講演は長すぎるので、長くても40分がよい。
- 素晴らしいワークショップだった。とても楽しかった。
- 主催者たちのもてなしは素晴らしかった。
- シャワーに加えてお風呂があればよかった。
- すべてがとても良かった。今まで参加した中で最も良い会議の中の一つだった。
- 科学分野の中でキャリアを始めたばかりの学生にとっては、この会議は本当に良い刺激と科学における自信を高めてくれた。
- 素晴らしいワークショップを開催してくれ、ありがとう。
- このような素晴らしいワークショップを手配してくれ、ありがとう。とても楽しかった。
- シャトルバスについて、夜間の運行がもっと多くあれば社会的イベントがもっとできただろう。
- シーサイドハウスの場所が沖縄の繁華街から比較的遠いので、自由時間を効率よく過ごせなかった。
- 将来また会議で沖縄を訪問できることを楽しみにしている。この会議から私が受けた全体の印象は、興味深い科学がここで起きているということだ。
- この場所で、私の研究発表をする機会をくれ、ありがとう。おそらく今まで参加した中で最も興味深いワークショップだ。講演者たちのホテルへのアクセスがもっと便利ならばよかった。そうすればイブニングディスカッションの参加がもう少し増えたと思う。
- 講師がイブニングディスカッションに残って貢献できるよう、ホテルへのシャトルバスの頻度を夜は増やすように提案したい。
- 発表会場の机の配置が(スクリーンを)少し見にくい。
- 素晴らしいワークショップだった。見事！
- ディナー後のイブニングセッションは少し困難。午後の遅い時間(5時30分か6時)でディナーの前には？

ワークショップアンケート

OIST Winter Course "Evolution of Complex Systems" 2008 (OWECS 2008)

2008 年度ウインターコース「複合システム進化コース」

日付: 2008 年 12 月 8 日~12 月 14 日

回答数 20 件 (講師 1、生徒 12、その他 7 [参加者 6、OIST スタッフ 1])

1. 以下の点に関して、コースの印象はいかがでしたか。

1. 講義内容

優良(11)、良(7)、可(0)、不可(0)、未回答(2)

- ・ 生徒達のプレゼンテーションの時には講師の方々に講師を努めてほしい。または同じような研究的関心・モデル生物の講師の後に生徒のプレゼンをさせる。
- ・ ワークショップのみ参加した。(評価の未回答者より)
- ・ とても有名で、ためになる講演者だった。レヴィン先生とマクギニス先生の講義は素晴しかった。
- ・ 実験的な研究があればもっと良かった。
- ・ 全般的には、講義は素晴しかった。改善できるとすれば、もう少し講義に一貫性を持たせる点だろう。そうすれば単独の講義より「講義シリーズ」になり、まとまってくるだろう。発達胎生学と進化はもう少し詳しく説明しても良かった。例えば、単一生物として取り上げるより、比較手法を用いて、シグナル経路や形質の出現を議論する等。
- ・ 講義内容はもっと実用的なセッション、つまり、講師と生徒がもっと密接に交流できるセッションを含むべきと思う。
- ・ トピックはとても興味深いものだった。講義は明瞭、有益だった。
- ・ 良い講義。進化と発達の背景から高度なトピックまで良く理解できる。推薦レポートの序論に感謝している。
- ・ 説明はとても良く、よく理解できた。

2. 会場設備

優良(19)、良(1)、可(0)、不可(0)

- ・ 建物は豪華で、素敵な立地だった。
- ・ ラボ以外は、会議に相応しい場所。

3. 宿泊施設

未回答(1)

シーサイドファカルティハウジング: 優良(1)、良(0)、可(0)、不可(0)

シーサイドハウス: 優良(16)、良(2)、可(0)、不可(0)

- ・ 素晴らしい宿泊施設。予想していたより遙かに良かった。日本人のルームメイトと過ごせて満喫した。彼女と出会えて良かった。
- ・ 宿泊施設に何も問題はなかった。
- ・ 個人的に自然が大好きなので、この宿泊場所は私には大変良かったようだ。
- ・ 清潔。私にとって外国人と部屋をシェアできるのは良い機会だった。

4. 食事

優良(18)、良(2)、可(0)、不可(0)

- ・ 驚き。素晴らしい食事。
- ・ この一週間のとても素晴らしい食事には嬉しい驚きだった。
- ・ 食事の種類豊富さもサービスも素晴しかった。
- ・ 良かったが、もしカレーがあれば私にはもっと楽しめました。
- ・ 美味しかったし、沖縄の食べ物は私には興味深かった。

5. エクスカーション

優良(10)、良(4)、可(1)、不可(0)、未回答(5)

- ・ 参加しなかった。
- ・ キャンパスサイトを短時間視察できるのも面白いだろう。
- ・ 素晴しかった、水族館が気に入った。
- ・ 瀬底研究所と美ら海水族館に行くことができ、とても嬉しかった。
- ・ 良かったけれど、時間がとても短かったので、イルカショーが見られなかった。「ザンネンでした。(日本語で)」
- ・ 沖縄の生活を垣間見ることができ、良い機会だった。

6. 事務局

優良(16)、良(4)、可(0)、不可(0)

- ・ いつもその日に何が予定されているかよく分かった。
- ・ 「参考文献」が「良」だった。
- ・ すべてがよく準備されていて何のトラブルもなかった。素晴らしい。
- ・ 参考文献リストをもっと早くもらいたかった。
- ・ スケジュールや観光地インフォメーション提供を親切に対応してもらい感謝している。

7. 旅行の手配

優良(15)、良(1)、可(2)、不可(0)、未回答(2)

- ・ 各2回の乗り換えがなければ良かったのに。旅程は往復とも27時間ずつかかった。でも全体的には良かった。
- ・ 手配にもう少し自由があるといい。沖縄にもう数日滞在したかった。1日遅く出発するのに少し余分に料金がかかっても、多くの人は差額を支払っただろう。それでも、全ての旅程が負担してもらえたことは大変に感謝している。
- ・ 迅速な手配だった。
- ・ とてもよく手配されていたので、OIST シーサイドハウスまで何のトラブルもなく辿り着いた。
- ・ OIST まで簡単に行けると感じる。

8. 沖縄の印象

優良(14)、良(5)、可(1)、不可(0)

- ・ 沖縄を見て回る時間がほとんどなかった。
- ・ 見事なところ。
- ・ 快適な気候だった。
- ・ 沖縄を訪れるのは初めてだったが、私は同じ天気・気候の国の出身なので、私には第二の故郷のように感じられた。
- ・ とても良い気候だと感じた。
- ・ 良いところ。自然が豊富。食事が美味しい。研究環境を整備するのは難しいかもしれないと感じる。

9. その他のご意見、ご提案

- ・ 2~3日間沖縄を観光するため滞在を延長するのに、フライトを自己負担しなければいけない、というところでなければ素晴らしいだろう。
- ・ 旅費規程について全般コメント: 主催者側は会議の参加者に対して、会議の前後に自由に休暇を取れるようすべき。特に参加者が海外からの場合には、これは、欧米の研究者は日本人と比べて時間の価値観が決定的に異なるので、彼らを引き付けられるとても些細な条件の一つ。だから、会議の前日から参加して会議の最終日には出発しなければ経済的サポートを与えないというのは、私の意見では、海外からの訪問者に日本の科学や文化を紹介するに当たって全く非効率的な方法ではない。
- ・ 1つか2つの午後セッションを夜のセッションとして移動すれば、シーサイドハウスの立地の利点を参加者が活かせる。夜の活動、ディスカッションはいつも良いものではあるが、数晩あると

同じだった。OISTの研究者も同様に口頭発表をさせては、OISTで現在進められている研究活動を知ることができるのは興味深いだろう。

- このコースに申し込んだとき、プログラムの詳細を見つけられなかった。だから、ワークショップの期間中に講師が講演をしないことが分からなかった。それが唯一残念な点。もし機会があれば、次回はコース全体に参加したい。
- 私は日本に住んでいるので、日曜の夜に出発できて丁度良かった。ただ、他の何名かの人達は（フライトを自己負担しなければ）日本にもう1日長く旅行で滞在することも出来ず、残念がっていた。欧米文化では研修・研究目的の出張と休暇を組み合わせるのはとても一般的。生徒・講師がここにいる間にもっと日本を発見できる機会を与えることをお勧めする。例えば何日間か長く自費で滞在しても、フライトは負担してあげれば、実現できる。
- スケジュールがかなり過密だった。個人的なレクリエーション活動ができるよう午後一回自由時間を取り入れては。例えば、那覇市や沖縄市へ行く、シュノーケリングやダイビング、文化遺産を訪問、おみやげを買う。
- 将来沖縄に住み、研究できる機会があれば、とても嬉しい。
- このロケーション、機構、サポート、食事は、これ以上良くしようがない。ただ一つ残念なのは、日本の旅費規程がとても厳しいことで、それゆえ旅費は唯一「可」としたが、それでOISTが責められるべきではない。空港からへの送迎サービスは素晴らしい。

2. 将来のコースについての提案

1. もし来年もこのようなコースが開催されたら、同僚に申し込みをするよう勧めますか？

- はい。(4)
- はい！！！！
- はい、する。
- 必ず。
- 絶対！
- おそらく同僚に申込みを勧めるだろう。
- はい。たくさん学ぶことができ、周囲の環境は美しく、もてなしは比類ない。もしこのコースを知っていて、申し込まない方がいるというのは考えられない。
- はい、このコースに参加するよう強く勧めたい。
- 当然。もう既に他の人達に勧めた。
- はい。素晴らしい会議が開催される、訪問するのに素晴らしい場所だと伝える。
- はい、大規模な会議と重複しないようにしてほしい。
- もちろん、将来のキャリアに関する知識を豊かにする特別な何かを学べる、誰にも与えられた素晴らしいチャンスだから。
- 間違いなく！私が見たように、このコースは、発生生物学者だけでなく、色々な分野の多くの生徒や研究者に適している。
- はい。このウィンターコースは、よく構築されたトピックの講義を聴き、外国研究者と交流できる、貴重な機会だ。
- もちろん、勧める。
- はい。このコースを勧める。
- はい、自分の同僚に勧めたい。

2. コースの長さ（6日間は長いですが、短いですが？）

- ちょうど良い。
- 適正。
- ラボコースがあれば素晴らしい。参加者によっては6日間で良いだろう。私の場合は、自分のラボを10日間以上不在には出来なかったと思う。
- ワークショップだけ参加した。丸2日間だったらもっと良いと思う。
- コースの内容にとっては、長さは良かった。
- ワークショップのみに参加したが、6日間は講義、ワークショップ、フリーディスカッションにとって良いと思う。
- 6日間は生徒達にとっては良かったが、ポスドクにとっては長過ぎたと思う。なので、長いか短いかを言うのは難しい。
- 少しだけ長過ぎたと思う。

- コースの長さは適当だと思う。
- 内容面で長さは適正だったと思うが、私の前述コメントも見てほしい。
- 短い。最低でももう1週間は延長すべき。
- 6日間はとても短い。もっと学びたい生徒にとってはもっと時間があるほうが良い。
- たぶん一日多かった。
- 私の印象では、この講義の量に対して、コースの長さはちょうど良かった。
- ちょうど良い長さだった。
- 6日間は適当だった。
- 6日間はぴったりだと思う。
- ノーコメント。

3. 招聘講師（生徒）とは十分に交流が持てましたか？

- はい。(4)
- 参加者間には確かに力強い交流があり、講師と交流する機会も十分にあった。
- 講師はワークショップ期間中は不在だったので、生徒と講師の交流はほとんどなかった。
- はい、十分な時間があつたので、他のラボで講師や生徒とよく議論した。それが一番良いことだった。
- たぶん。
- はい。マイク・レヴィン先生の“ホット・ボックス”が気に入った。会議室がもう少し大きくなかったのが残念。
- はい、十分だったし、雰囲気は本当に良かった。
- はい、食事を一緒に取れるのがとても良かった。おかげで、もっと話を聞きたい時はいつでも講師に近づくことができた。
- はい。私は英語が流暢でないで、講師の話についていくのが少し難しい。
- はい、とても良い交流が持て、ためになった。
- 海外からの偉大な教授陣は常に一緒に行動して、日本の若い生徒達と交流を図ろうとしていなかったように私には思えた。でも、これは彼らだけの責任ではないかもしれない。
- はい、お互いに接触するのに最低限の十分な時間はあった。
- これは最も重要な質問だと思う。英語を母国語とする講演者ももっとゆっくりと話し、教えるべき。
- はい、規模は最適だった。
- はい。講師に質問し、話す機会は十分にあった。食事中や他の空いた時間など、皆がシーサイドハウス周辺にいて対応してくれたので。特に長時間のディスカッションはとても良かった。
- 講師と生徒は丁寧に話してくれた。それが良い点だった。貴重な時間を過ごすことができた。
- 私は普段は英語を使わないので、私にとって良い機会だった。海外の生徒達と積極的に話すよう頑張った。

4. 今後取り上げるテーマや招聘講師の提案

- トピックは良い。エイリーン・ファーロングのゲノミクスや、ハマダ・ヒロシのマウス早期胎生学も、もう少し取り入れても良いかも。
- ほ乳類の発達はおそらく十分に説明されていなかった。
- 小進化やスペシエーションを研究している方も候補だと思う。例えば、洞窟魚、カブトガニ、シクリッド魚を研究している方も良いと思う。
- システム生物学—小進化、プラント、エンコード・プロジェクトからの人々を招待してはどうか。
- 統合進化生物学（分子進化、古生物学、発生生物学などの統合）
- このコースは「ウッズ・ホール胎生学コース」のようなものにも発展すると聞いた。胎生学コースの部分をいくつか顕微鏡で視ることができれば良いのだが、次回講師の推薦：マーク・マーティンデル。
- 講師を何名かお勧めしたい。
マックス・J・テルフォード先生（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ）
ショーン・B・キャロル教授（ウィスコンシン大学）
ニール・シュービン教授（シカゴ大学）
- 生物情報学？
- RNA生物学（ハルヒコ&ミキコ・シオミ、アレックス・シーア、ロナルド・プラスターク等々）
- 環境生物学
- 将来的には、この講義シリーズは（もし多細胞性が「複合システム」の狭義の定義でなければ）真正後生動物よりもっと基礎分類学を含むよう拡大してもよいのでは。推薦したい講師は、ニコ

- ・ ール・キング。また、複合性は、単一生物から、宿主と共生生物（共生的、片利共生的、寄生性）を含んだ多層種体系のディスカッションまで、広げてよいかも。
- ・ 何名かの講師は、自分たちの研究や研究成果の発表ばかりでなく、もう少し進化的トピックに的を絞って講義をするべき。
- ・ 生物科学研究に関連する最新の情報を含んだ、新しい科学のトピックなら何でも。
- ・ （特に生徒に役立つような）生物系の研究のための新しい方法論
- ・ 進化発生学が良い。進化と発生の関連知識を考えるのは重要だと思う。だから、研究者が彼らの研究と見通しについて、最低でも二局面から、例えば発生と変形メトリクスから、講義をするのは興味深いと思う。

3. OISTについて

1. OIST をどのように知りましたか？

- ・ インターネットで見つけた。
- ・ 大学に貼ってあったポスターで。
- ・ OIST のプロジェクトについて最初に知ったのは、私が東京大学で院生だった時に、東京大学のライ・シンイチ教授からだった。それから OIST の進捗やイベントをチェックしていた。
- ・ OIST で開催された他のミーティングに参加した友人から聞いた。
- ・ 佐藤先生を知る私の機関の誰かが、このコースを宣伝していた。
- ・ ウェブサイトで。
- ・ OIST について佐藤先生が教えてくれた。
- ・ 日本動物学会からの e-mail で。
- ・ 同僚が教えてくれた。
- ・ 主催者からの招待。
- ・ 私のアドバイザーから。
- ・ 佐藤ユニットの方と連絡を取っていたので。
- ・ 友人を通して。
- ・ インターネットと友達から。
- ・ OIST についてマイク・レヴィンから聞いた。
- ・ OIST について佐藤先生の以前の生徒から教えてもらった。
- ・ 新聞のレポートから知った。
- ・ シニアリサーチャーから聞いた。
- ・ 自分が OIST スタッフ。

2. OIST の印象

- ・ 素晴らしいところ。いつでも戻ってきたい。
- ・ 第一印象は良いが、建物とラボの建設が完成し、どのように事業が進むかを見るのを待ちたい。
- ・ 類似希な教授陣のリーダーシップに支えられ、最先端の施設が計画され、国際的視野があり、独特で美しい環境。
- ・ 傑出した研究環境。
- ・ 大変恵まれていた機構のように見える。
- ・ とてもプロフェッショナルで、熱心で、大望のある、一見したところ十分な資金力のある機構。
- ・ 生物多様性と海洋生物の研究をするには最高の立地と思われる。
- ・ 素晴らしい！完璧な機構！
- ・ 大きくて素敵な機構！
- ・ 極めて優れた機構になると思う。
- ・ 期待していたより遙かに素晴らしかった。施設は良く、事務局はプロフェッショナル。
- ・ OIST は良い設備を持っていると思う。
- ・ 将来の展望に感嘆し魅了されている。
- ・ 良い。
- ・ 最新の機器があり、研究にはとても良いと思う。
- ・ 研究施設を実際には見なかったが、私が会った教授陣は素晴しかった。
- ・ 一般的に見れば、この機構は研究、コースやワークショップをするにはとても良いところと思われる。研究グループとトピックの幅広さには感銘しているし、新しいキャンパスが出来れば機構全体は更に改善され、可能性を拡大していくと思われる。

- ・ OIST は研究するのに大変快適なところ。
- ・ 良いところ。次の機会には研究施設が見学できれば良い。

3. OIST への求人応募を検討しますか？

- ・ はい。(4)
- ・ いいえ。
- ・ はい、もちろん。
- ・ 必ず。
- ・ もし貴機構が科学の観点から本当に魅力的であれば、可能性はある。
- ・ 基礎生物学に絞って研究できるなら、OIST のポジションに応募したい。
- ・ たぶん今から数年以内に。
- ・ もし機会があればポジションに応募するだろう。
- ・ はい、応募について考えている。
- ・ はい、もし私の配偶者にもポジションを用意してくれるなら。
- ・ はい、おそらくインターンシップで。
- ・ もし OIST で研究する機会が得られれば、私の研究キャリアを高めてくれる素晴らしい機会となるだろう。
- ・ いいえ、今のサンディエゴで十分過ぎるほど満足している。
- ・ 私の必要条件が全て叶うなら絶対に応募したい！
- ・ 将来 PhD を取得したら OIST のポジションに応募したい。
- ・ 良い。OIST はゲノム計画で進捗しており、興味深い。

4. もし応募する場合、沖縄に移る、または移らない、もっとも重要な要因は何ですか？

- ・ ラボスペースや高性能機器が重要な要因になる。相当離れた島ではあるが、良い生徒達を引き付けると、日本の科学コミュニティとの強い連携。
- ・ 沖縄は孤立しているようなので、最も重要な点は、日本や海外でなされた研究との交流の強さ。これは例えば、毎週セミナーを実施してくれる外部訪問者の存在や、日本の本島での会議に容易に参加できること。
- ・ 沖縄での生活コストと水準 VS 給与
- ・ 研究環境。例えば、施設、研究費、近接する研究分野の研究者といかに交流がとれるか、等々。
- ・ 日本のアメリカ軍。
- ・ 日本・沖縄文化が西洋人に馴染みがない点。日本は家族や故郷から遠く離れている点。どちらの問題点とも、日本のどの機関にも当てはまることだろう。
- ・ 他の日本人科学者と、(新しい技術に関連する) 情報を共有し、頻りに科学的コミュニケーションを保つ点が、問題になるだろう。
- ・ 家族組織
- ・ 妥当なポジションにつけるかどうか。
- ・ OIST は科学的視点ではとても魅力的だと思うが、別件で沖縄に移る予定がある。私にとって最大の問題点は、孤立、つまり都会の生活から離れていること。
- ・ 学齢期の子供達がいる。日本の本島の都市部と同等の質の教育を受けさせられるかが心配。
- ・ 特になし。
- ・ ポスドクや研究者としてなら。若手研究員として自分の研究を実施するに当たって、自身の個性とシニアスタッフからのインスピレーション・専門知識との間で、良いバランスを取れるか。
- 1. 私の計画提案に対して、研究資金や関心（すなわち機構内のアドバイスやサポート）は満足できるものか。
- 2. 給与と福利は、私と妻が生活を維持できる妥当性があるか。
- ・ 私には当てはまらない。
- ・ 第一に、私の家族が住んでいるところから離れていること、第二に、この言葉の壁があること。日常生活をしていくには日本語を勉強しなくてはならないだろう。だが、ここの運営陣は日本語を話さない人達への対応も準備ができており、それはとても助けになるだろうと思う。
- ・ 引っ越しを考えることはできないが、一般的に言って、沖縄は日本の東京、大阪等の大都市から離れているのが一つの理由。
- ・ 研究の環境。
- ・ 前述のとおり（「今のサンディエゴで十分過ぎるほど満足している。」）

5. OIST のプロジェクトに関して他の意見やリクエストは？

- ・ 独立研究者のポジションをどうかもっと作ってほしい。

- ・このコースがとても良かった。生徒同士でディスカッションをする時間も十分にあったし、夜のディスカッションでは皆さん自分たちの研究分野について良く説明できていた。もしかしたら JSPS の短期助成プログラムで私たちのラボに来てもらえるかもしれない!
- ・OIST はもっと情報開示を積極的にすべき。
- ・OIST は持っている可能性をもっと宣伝すべきで、そしてより良い給料形態をよい日本の科学者達に向けて提示すべき。
- ・とても良い CV があればポストの経験がなくても調査員のポジション申請を受け付けてもらえるだろうか?
- ・OIST プロジェクトの多大なる成功を祈っている。世界でも高い水準の研究施設になることを祈っている。
- ・OIST のホームページから既に沢山の情報が得られている。
- ・ホームページにある OIST プロジェクトはユニークで興味深い。このプロジェクトが前進・発達することを願っている。

4. 全体的なコメント & 提案

- ・OIST に来て本当に楽しかったし、素晴らしい時間を過ごせた。私の期待を遙かに上回っていた。招待してくれてどうもありがとう。
- ・このコースは本当に素晴らしい。生徒の間でも、ディスカッションには十分な時間を持たた。夜のディスカッションでは皆、自分の研究分野を詳細に説明できた。成果として、今年は JSPS の短期奨学金を利用して私たちのラボに短期プロジェクトで来る生徒がいるかもしれない!
- ・大変良く出来ていた。参加する機会を与えてくれてありがとう!
- ・この会議に参加する機会を与えてくれた主催者に本当に感謝する。様々なラボからの大勢の方々と十分に話し合う時間が取れた。このような素晴らしい会が今後も続くことを願っている。OIST をもっと世の中に知ってもらうには良い方法だと思う。
- ・もし同じようなコースが来年も公表されたら、申し込みたい。貴機構の世界規模の研究環境を目指しているポリシーに大変興味がある。貴施設はこのポリシーを達成するのにふさわしいが、情報公開が不十分だ。こちらの企画にいつか参加したいと願っている。
- ・周囲の美しい環境の中で、素晴らしい、また、よく計画されたコース。OIST と沖縄を訪れるこの機会を得られ、とても嬉しいし、また、OIST と沖縄の両方に大変良い印象を持っている。
- ・トップの科学者達の講義を聴くすばらしい機会だった。OIST の PI による講義も、もっと聴きたい。
- ・これはコースだったけれども、同時にもう少し沖縄を満喫する価値があると思う。何名かの生徒達は遙か遠方から旅してきており、彼らがここに来られる唯一の機会かもしれない。だからもう一つツアーを計画することを勧めたい。おそらく、沖縄の文化に焦点を合わせたツアー。貴機構はいくつかの重要な場所からとても離れており、自力で行くのは難しい。それ以外では、コースはとてもよく計画されていたと思う。
- ・沖縄の OIST で素晴らしい一週間を過ごした (2008 年 12 月 7 日~14 日)。世界でも有名な生物学者数名と会い、私の知識を豊かにすることができた。ウィンターコースの主催者、共催者、全ての関係者に、特にこのような大成功のコースとワークショップを準備した佐藤矩行先生と彼のラボ (マリンゲノミクスユニット) スタッフ全員に感謝したい。将来またいつかどこかで会えたら嬉しい。
- ・コースとそれに続くワークショップとに分けた構造はとても良い。おかげで生徒は自分達の研究の印象も与えることができた。新キャンパスが出来上がればすぐに、実用的な部分も強化されるだろう。実用的部分を伴う理論的な講義は、この部分を丸一日に拡大しても良い。だからもう一日で 3 講義だろうか。でも私の意見では、そのための時間は十分にあった。このコースは進化発生生物学の基本原則と現在の論議と功績について、この分野の主要研究者から学ぶ素晴らしい機会だ。
- ・このスクールとワークショップで素晴らしい体験をした。この機会に招いてくれたことを感謝する。これは私にとって英語でコミュニケーションを取り、外国の生徒達と交流する良い機会だ。講義も良い。教授陣は背景から先端研究まで話してくれ、質問にも十分に答えてくれた。今度は OIST のラボを見学できると良いと思う。

Blueprint of the New Graduate University

新大学院大学の青写真

July 30, 2008

The Board of Governors

The Okinawa Institute of Science and Technology Promotion Corporation

独立行政法人 沖縄科学技術研究基盤整備機構 運営委員会

新大学院大学の青写真(仮訳)

運営委員会は、大学院大学の将来に関する主な事項(青写真)について検討を行った。運営委員の合意を得たものについては、以下のとおり要約できる。

【総論的事項】

- ・ 制度的事項については、所要の法律に盛り込まれるものも含まれる。他方、特に教学的事項については基本的に法律には盛り込まれない。

【制度的事項】

1. 大学院大学の目的
 - ・ 世界最高水準の科学技術に関する研究及び教育を実施することにより、沖縄の自立的発展と、世界の科学技術及び経済社会の向上に寄与すること。これらの目的は以下の理念に基づくものである。

世界最高水準 (Best in the World)
柔軟性 (Flexible)
国際性 (International)
世界的連携 (Global Networking)
産学連携 (Collaboration with Industry)

大学院大学の設立に当たっては、これらの目的を尊重する必要がある。

2. 大学院大学の名称
 - ・ 英語の名称については、現在と同じ名称 (Okinawa Institute of Science and Technology (OIST)) とし、副称 (International Graduate University) を検討する。
3. 大学院大学の設置形態
 - ・ 大学院大学の法的な位置づけについては、大学院大学の自主性と運営の柔軟性を尊重する観点から、「特別な学校法人」により設置される新たな形態の大学とする。
4. 法人の管理組織
 - ・ 大学院大学の監督主体として、ボード(理事会)が最高意思決定機関としての役割を担う。
 - ・ 理事会の役割と最高執行責任者 (CEO) であるプレジデント(理事長・学長)の役割は明確に区別される。理事会は、プレジデント(理事長・学長)の選任・解任及び寄附行為の変更を含む重要事項の決定を行う。
5. 国の支援と関与
 - ・ 本大学院大学が、沖縄の振興と世界の科学の発展に寄与する世界最高水準の大学院大学となるためには、長期にわたる政府による高水準の財政支援が不可欠であり、特別の財政支援の仕組みの検討を要請する。

- ・ 運営委員会は、国の特別の財政支援に伴い、税金の効率的・効果的な使用について説明責任・透明性の確保の仕組みが必要であることを了解する。
- ・ なお、政府における具体的検討においては、大学の自立性・柔軟性や学問の自由を損なわないよう留意することを求める。

6. 新法人の設立

- ・ 新法人の円滑な設立のため、大臣が設立委員を任命する。沖縄機構と新法人の継続性の観点から、運営委員を実質的に設立委員とする必要がある。

7. プレジデントの選考

- ・ 大学院大学のプレジデント(理事長・学長)の候補者の選考を直ちに開始する必要がある。
- ・ プレジデントは国際的な学術コミュニティから選ばれる必要がある。

【教学的事項】

8. 教育研究活動

- ・ 大学院大学の教育研究活動は、生命科学、物質科学、応用科学を含む学際的で先端的なものとする。

9. 教育研究組織

- ・ 約50PIs規模での設置認可・開学が前提とされていることを踏まえ、1研究科と4程度の専攻とすることが考えられる。
- ・ 長期的には300PIs程度を理想形とし、その際の研究科や専攻について将来検討される必要がある。
- ・ 教員のテニュア(終身在職権)と定年については、引き続き検討する。

10. 教育課程

- ・ 博士課程
- ・ 学位は Ph.D(博士)
- ・ 教育課程編成の基本方針、修了単位数、授業科目の概要等は引き続き検討する。

11. 学生募集

- ・ 国際的な入学時期を勘案し、入学は4月と9月の年2回可能とする。ただし、入学者の審査・選抜については、学生の質の均一性を維持するため、各受験生共通の手続きにより年1回行われるべきである。

12. 他の研究機関との連携

- ・ 他の機関との連携の具体的あり方について引き続き検討する。

13. その他

- ・ 公用語は英語とする。
- ・ 教員と学生の少なくとも半数を外国人とすることを旨とする。

開学までに必要となる手続き

※運営委員会としては、学生の実質受入れを、2010年9月から開始することが必要と考える。

大学院大学の青写真の検討；制度的事項および教学的事項



次期中期目標 (2009年度～2011年度)

次期中期計画 (2009年度～2011年度)

内閣における法案の準備

国会における審議



設立委員の任命、学校法人の設立準備

- ・ 学校法人の寄附行為
- ・ 大学の名称・目的
- ・ 研究科・専攻の名称
- ・ 教育課程の概要
- ・ ボードメンバー(理事)の選任
- ・ 理事長・学長、副学長、研究科長等の氏名
- ・ 教員名簿



学校法人の設立認可・大学院大学の設置認可申請 (毎年3月)



大学設置・学校法人審議会における審査 (約7ヶ月)



文部科学大臣による認可 (毎年10月)



開学準備 (第1回理事会の開催、学生の募集等)



大学院大学開学

最低1年

検討すべき事項

- ・ 大学院大学の青写真の一部は、2009年度から始まる次期中期目標・中期計画に盛り込まれる。
- ・ 国際的評価を短期間に確立することは困難であり、長期間の政府の支援が必要であるが、特別の財政措置の仕組みの検討に当たっては、国際的評価の確立状況を考慮する必要がある。
- ・ 自立的運営に向け、競争的資金を含めた外部資金の充実のための努力が必要である。
- ・ 説明責任・透明性の確保の仕組みについては、以下の観点がある。
 - * 私学補助に係る憲法上の「公の支配」の要請
 - * 補助金の適切な執行(事業計画・成果の審査、報告徴収、是正措置、財務諸表の公開、外部監査、監事の任命等)
 - * 沖縄振興や科学技術振興の政策目的の観点からの政策対話の仕組み(連絡協議会等)
- ・ 設立委員には運営委員以外の者が含まれることも想定される。
- ・ 機構から新法人への業務、財産、職員等の承継方法を法律に規定する。
- ・ 各時期の実際の規模については、採用活動の状況、競争的研究資金の獲得を含めた国際的評価の状況を踏まえて検討される必要がある。
- ・ 相互の利益に資する分野において琉球大学との協力を促進する必要がある。

<添付資料#12-2>

The Activities of outline of the Graduate University Preparation Group in FY2008

平成20年度大学院大学設置準備グループの活動概要

(As of the end of March 2009)
平成21年3月現在

- Five meetings--May 8, Sep 30, Dec 2, Jan 27, and Mar 24
(5月8日、9月30日、12月2日、1月27日、3月24日の計5回開催)
- Discussion issues (検討事項)
 - ✓ Basic structure of the Graduate University
(大学院大学の基本的な姿)
 - ✓ Survey of non-Japanese Graduate Universities
(海外の大学院大学についての調査)
 - ✓ Survey of graduate S&T programs
(科学技術大学院プログラムに関する調査)
 - ✓ Next steps in implementing graduate program
(大学院プログラムの実施)
 - ✓ Preparations for accepting graduate students at OIST in 2010
(平成22年に機構に学生を受入れるための準備)
 - ✓ Future tasks for Graduate Committees
(大学院コミッティの今後の業務)
 - ✓ Future tasks for Graduate University Preparation Group
(大学院大学設置準備グループの今後の業務)
 - ✓ Deliberations on the following items
(下記の事項に関する審議)
 1. By-laws and University rules
審附行為と学則
 2. The number of officers (Vice President (s), etc) and job description of those officers
役員(副学長等)の数及びそれらの業務
 3. Types of *Kenkuka* (graduate school(s) and *Senko* (major(s)))
研究科の種類(研究科と専攻)
 4. Admission capacity/ Enrollment capacity
入学定員/収容定員
 5. Tuition and stipend
授業料及び奨学金
 6. * Important issues related to accreditation
認可に関する重要事項
 - ✓ Time schedule of Graduate Committees' activities in FY 2009
(大学院コミッティの活動スケジュール)

OIST Graduate Committees (大学院コミッティ)

PI Name (代表研究者氏名)	Neuroscience (神経科学)	Molecular Sciences (分子科学)	Mathematical & Computational Sciences (数学・計算科学)
Arbuthnott	X		X
Brenner		X*	X
DeSchutter	X		X*
Doya	X*		X
Endo	X	X	
Masai	X	X	
Maruyama	X	X	
Miller			X
Naito	X		
Price		X	
Samatey		X*	
Satoh		X	
Sinclair			X
Stiefel	X		X
Takahashi	X		
Tomomura		X	
Tripp	X		
Wickens	X		X
Yanagida		X	
TOTAL	11	9	8

* Chair or Co-Chair

Survey of Universities and Graduate Schools

大学・大学院等に関する調査

< Objective 本調査の目的 >

The objective of this survey is to collect information concerning universities and graduate schools in order to contribute to the preparative work for the establishment of the Graduate University by Okinawa Institute of Science and Technology (hereafter OIST).

本調査は、大学及び大学院等に関する情報を収集し、独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構（以下、機構と称す）における大学院大学の設立準備に資することを目的とする。

< Survey items 本調査の内容 >

- Education and research fields
教育・研究分野
- Organization structure, regulations, bylaws, etc.
組織体制、各種規定等
- Personnel system for faculty and researchers
教員、研究者の人事制度
- Finance, including revenue / expenditure; remuneration structure of presidents, other officers, professor, and researchers; and student support.
財務（収入・支出を含む）、報酬制度（学長、大学役員、教員及び研究者、各種給付金、手当を含む）、学生支援制度

The information was collected preliminarily from each institution's websites and other sources, followed by the on-site interviews with appropriate officers / staff of each institution.

調査にあたっては、各種情報をそれぞれの調査機関のウェブサイト等より収集した。予備調査を行った上で、対象機関の担当者にヒアリング調査を実施した。

< Target universities 対象機関 >

- *Massachusetts Institute of Technology (MIT)* マサチューセッツ工科大学
- *California Institute of Technology (Caltech)* カリフォルニア工科大学
- *Stanford University* スタンフォード大学
- *University of Cambridge* ケンブリッジ大学
- *University of Tokyo* 東京大学大学院新領域創成科学研究科
- *Tokyo Institute of Technology* 東京工業大学大学院理工学研究科
- *Keio University* 慶應義塾大学大学院理工学研究科基礎理工学専攻

Table of Contents 目次

1. Introduction 序
 - 1.1 Objective 本調査の目的
 - 1.2 Survey items 本調査の内容
 - 1.3 Target universities and graduate programs 調査対象大学・大学院プログラム
2. Education and research fields 教育・研究分野
 - 2.1 Outline of the target universities and graduate programs 調査対象大学・大学院プログラムの概要
 - 2.2 Graduate programs 大学院プログラム
 - 2.2.1.1 Degree conferment 学位授与
 - 2.2.1.2 Admissions 入学
 - 2.2.1.3 Master's programs 修士課程
 - 2.2.1.4 Doctoral programs 博士後期（後期博士）課程
 - 2.3 Evaluation of education and research activities 教育・研究活動評価
3. Organization Structures; regulations, bylaws, etc. 組織体制・各種規定等
 - 3.1 Organization structures 組織体制
 - 3.1.1 Number of members involved 人数構成
 - 3.2 Regulations, bylaws, etc. 規則・規程など
4. Personnel system for faculty and researchers 教員・研究者の人事制度
 - 4.1 Legislation and practices affecting personnel system 人事制度についての法令
 - 4.2 Personnel system for faculty members 教員の人事制度
 - 4.3 Personnel system for researchers 研究者の人事制度
 - 4.4 Personnel system for administrative staff 職員の人事制度
5. Finance, remuneration structure, student support 財務、報酬制度、学生支援
 - 5.1 Finance 財務
 - 5.1.1 Revenue 収入
 - 5.1.2 Expenditure 支出
 - 5.2 Remuneration system, including benefits and welfare 報酬制度（手当、福利厚生含）
 - 5.2.1 summary まとめ
 - 5.2.1.1 Compensation 給与
 - 5.2.1.2 Benefits and welfare 福利厚生・手当
 - 5.3 Student Support 学生支援
 - 5.3.1 Financial Support 経済支援
 - 5.3.2 Other Support その他の支援

<添付資料 #12-4>

大学院大学開学に関する追加資料

1. 調査対象とした大学等のリスト（19年度、20年度、21年度（予定を含む））

【平成19年度】

前中期計画において大学院大学の良きモデルとして掲げた4機関を含む、設立当初は研究のみを実施しその後大学院としての地位を獲得した以下の8機関

ロックフェラー大学
 スクリプス研究所
 コールド・スプリング・ハーバー研究所
 ウッズ・ホール海洋生物学研究所
 ソーク研究所
 ジェネリア・ファーム研究所
 ヨーロッパ分子生物学研究所
 MRC分子生物学研究所

【平成20年度】

国内を含め、学部を持つ世界最高水準の名声のある科学技術系の伝統的な以下の7機関

マサチューセッツ工科大学
 カリフォルニア工科大学
 スタンフォード大学
 ケンブリッジ大学
 東京大学大学院新領域創成科学研究科
 東京工業大学大学院理工学研究科
 慶應義塾大学大学院理工学研究科基礎理工学専攻

【平成21年度（予定を含む）】

シンガポールでは平成19年にA-STAR大学院及びシンガポール国立大学、平成20年にナンヤン工科大学を訪問した。これらの機関のうち一つと平成22年に向けて連携大学院協定を締結すべく交渉を続けているところ。香港では平成20年に香港科学技術大学を訪問した。連携協定の推進についてより深い議論が計画されている。平成20年には台湾国家科学委員会と韓国デジューンのソルブリッジ国際大学から科学政策に関わる職員の訪問を受け入れ、連携協定の推進について可能性を探った。これらの機関との関係を構築することにより、優秀な教授陣や学生の採用、奨学金、報酬及びアジアの大学院教育プログラムについての情報を収集する機会を作ることができた。今年度中は、引き続き、ベンチマーキングの対象として、アメリカ、ヨーロッパのみならず、アジアの大学を含め機構のスタッフが訪問調査を実施する予定。

2. これまでの調査結果から得られたインプリケーション（大学院大学の開学に向けて何を読み取ったか）

これまでの調査結果から得られるテニュア、給与、手当、定年、業績評価のためのサービス内容を含む教員及び事務職員の任用の仕組みや、新大学院大学の教育課程等についてのインプリケーションについては、これまでの調査結果を整理した要約情報、要約データ、表などの背景資料を用いて、10月の機構運営委員会で吟味する予定。過去の調査結果から得られたいくつかのインプリケーション、サマリーは以下のとおり。

【大学院プログラム】

調査対象とした全大学に博士課程が設置されている。そのうちMITのCSBi、Caltech 応用物理、博士号を取得することを目指す学生しか受け入れていない。これらのプログラムでは博士課程の学修課程で要件を満たせば修士号の修得も可能となっている。ケンブリッジ大学のDepartment of Physicsには、Master of Philosophy¹の課程は設置されているが、受入学生数は限定的である。また、同Departmentでは、論文の質および独創性において博士号に求められる水準には達しない場合等には、Master of Science²の学位が授与されることもある。それに対し、スタンフォード大学のBioengineeringと日本の大学には修士課程があり、学生はまず修士課程の修了要件を満たした後、正式に博士課程に進むこととなる。博士課程の標準年限はアメリカの大学で5年、ケンブリッジ大学では4年である。

【人数構成】

MIT、Caltech、スタンフォード大学では、大学院学生数が学部学生数を上回っている。大学全学レベルでの教員一人あたりの学生数（大学院生）は2.1人から2.9人である。国内と海外における1教員あたりの学生数は、全学レベルで比較すると海外は2~6人、国内は2~3人であり、海外（特にアメリカ）のほうが1教員あたりの人数が若干多めである。

【教員の人事制度】

米国における教員の職級は professor (full-professor)、associate professor、assistant professor となっている。テニュア（終身在職権）は一般に full-professor と一部の associate professor に与えられている。assistant professor はテニュア・トラック（将来テニュア獲得につながる可能性のある職位）の対象となる。テニュアを未獲得ではあるがテニュア・トラック上にいる教員は、テニュア・トラックの職位への就任後、通常7年以内にテニュアのポジションを取得しなければならない。通常、テニュア付きの職位への採用または昇任の際は、それ以外の職位に比べて特に厳しい条件のもとで評価されている。英国では、研究や教育に従事している職員を academic staff と称する。この academic staff には professor、reader、lecturer という職級がある。英国では、academic staff は定年年齢に達するまで在籍する権利を持つが、たとえ教員であっても余剰人員整理などで解雇される可能性があるという点では、米国のテニュア付き職位とは若干異なる。通常、日本の大学の常勤教員には定年制度が

適用され、本調査対象の各大学においても規程を定めて実施している（東京大学、東京工業大学では定年は 65 歳と規定している。慶應義塾大学では定年に関する規程は確認できなかった）。しかし、一部の部局では人材の流動性を向上させることを目的とし任期制を導入しつつある。英国ケンブリッジ大学では、米国で一般的に採用されているような Tenure 制度と全く同様のものはない。また定年は 67 歳としているが、Employment Equality (Age) Regulations 2006 において、教員が雇用期限を延長できる権利を定めており、大学は教員から雇用の延長要望があった場合に考慮することとなっている。但し、大学側には必ずしも当該要望を受入れる義務はない。

【財務】

各大学における主な財源では、いずれの大学も補助金等による収入や資産関連収入が収入全体の大半を占めており、学生からの納付金（授業料、入学料等）の収入は収入全体の 10%前後の大学が多い。

【給与】

米国 3 機関の学長の給与は約 600,000 ドル（社会保険等除く）である。ケンブリッジ大学の支給額は米国と比較して低くなっている（ただし、過去 1 年における英ポンドの大幅な下落の影響を受け、米ドルに換算した場合低めとなることも一因である）。学長クラスの給与を国内と海外で比較したところ、国内 2 大学は海外における学長クラスの給与よりもいずれも低い水準にあった。慶應義塾大学の学長の給与情報は非公開である。

国内と海外の教員の給与を比較すると、Professor、Associate Professor クラスの給与は国内 2 大学よりも海外 3 大学の給与水準が高いが、下位の職位の教員（海外：Instructor、国内：助教（Assistant Professor））の給与は国内が海外の教員給与水準を上回っている。

【学生の経済支援】

各大学の学生への経済支援制度は大きくわけて、(1)学費等免除制度、(2)奨学金（給付金）等支給制度、(3)RA/TA 等の労働による給与、(4)旅費等研究助成となっている。海外と国内の経済支援制度を比較した場合、海外の大学では個別の研究機関で学生に対して支援を行っていることがあるが（CSBi, Applied Physics (Caltech), Bio-x (スタンフォード大学)、国内の大学でも寄附金による研究科独自の奨学金制度（慶應義塾大学大学院理工学研究科）はあるものの、個別の専攻やプログラム単位での奨学制度はない。奨学金等に関しては、特に海外大学で奨学金（給付金）による支援（フルサポート）制度が非常に充実しているのが特徴的である（CSBi (MIT) の Ph.D プログラムの学生については基本的に全ての学生が支援（フルサポート）の対象となっている）。